

〈退職された方々から〉

老人の熊本女子大学回想

山本 捨三（日本文学、昭和五十年退職）

熊本県立大学の前身渡鹿校舎の熊本女子大学の十七年間の想い出はついに忘れ難い。（昭和三十三年〜五十年）。今から約半世紀前の古い事である。現在九十七歳。

熊本女子大学の第一印象は玄関前の庭園に庭木の植え込みが多かったこと、古い素朴な木造校舎だったこと、そして特に忘れられないのは練兵場跡と聞く広い運動場から白煙を噴く阿蘇山を文字通り遠望したことである。

赴任後間もなく日本談義社から拙著「現代詩の視点」（昭和三十六）を出版したところ土地の作家文学者や名士等が出版祝賀会に参加くだされ大いに感激した。その後間もなく熊本大学の国文学の集中講義を頼まれて日本近代詩を講じた。その時の教場が旧五高校舎の一角だった。五高校舎はぼくの母校金沢の四高と同じく赤煉瓦の建築だったのでなつかしさと光栄とを同時に覚えて感動した。校舎の出入りに漱石を頭に描いた。熊本周辺の漱石の遺跡は何度も訪れた。そうこうするうちに全国の大学に安保闘争が波及し

熊本女子大も幾分騒いだが、それまではおおよそ楽園のようであった。勿論学問研究は怠りなく。

そのうちに世論が騒がしくなり女子大学亡国論とか女子大無用論とかが流行し、県も女子大の前途を問題にしました。要するに女子大学の改革。女子大の存続か廃止か、校舎の移転、男女共学の可否、学部学科の改編充実など。女子大廃止論と男女共学制には同窓生一同が極力反対し沙汰止みに終わった。しかしこれらの動きが教授会を刺激して大学改革委員会が発足し活動した。しかし活動の途中で多くの文家政学部長の任期が切れ翌年定年退職して京阪間に移住したので多くの女子大は渡鹿校舎で終わり、文学部と生活科学部の二学部制女子大学として白聖の新校舎に移転したのは数年後のことであつたらう。以上は北村初代学長から村中二代目学長・柿村三代目学長に懸けての追憶である。

最後に現在共学制の熊本県立大学として三学部と大学院を擁して全国に名を馳せている盛況を知るに及んでその将来をさらに期待したい。次に拙作漢詩を添えさせて頂く。

詠熊本県立大学創立六十年 山本丘南

其一 陽韻尤韻七言古詩

創立六十年盛況 創立六十年の盛況

燦然満白聖殿堂

燦然として白聖の殿堂に満つ

戦後開女子大学

戦後女子大学開かれ

鎮西芳紀群教場

鎮西の芳紀教場に群れたり

学制改男女共学

学制男女共学に改まり

師弟広真理探求

師弟真理の探求を広む

実現学自由独立

学の自由と独立実現し

県民期待前途悠

県民の期待前途悠なり

世界恒日新月异

世界は恒に日新月异す

月出台頭富春秋

月出台頭春秋富む

其二 寒韻尤韻七言古詩

熊本女子大学古

熊本女子大學古し

才媛喜緑陰研鑽

才媛緑陰を喜びて研鑽す

雲外白煙掠五嶽

雲外白煙五嶽を掠め

市内白川学徒安

市内白川学徒を安んず

学制変男女共学

学制男女共学に變じ

月出台頭白聖浮

月出台頭白聖浮かぶ

宇宙無窮広学海

宇宙は無窮にして学海は広し

温古知新學術優

温古知新なれば學術優る

(熊本女子大学名誉教授)

旧女子大の教壇に立つて

齋藤 泰（西洋史、昭和六十三年退職）

私は、一九七三年四月から八八年九月まで、十五年半、熊本女子大学に西洋史の教員として勤務した。今年三月、現在の勤務校を退職するので、私の大学教員の前半期、旧女子大で研究教育の機会が与えられたことになる。一九八〇年にキャンパスが移転したので、大江キャンパスと健軍キャンパスとも、ほぼ八年間ずつ在職した。大江キャンパスでは、本館二階に研究室があり、木製の床張りに、窓が上下開閉式であったのが印象に残る。新しい健軍キャンパスは、文学部棟四階西端の南側で、大きな窓から、遙か東に阿蘇を望む研究室であった。しかも教員室と研究室からなり、研究教育の環境は、全国の大学でもかなり恵まれていた。熊本を離れてから、これまで一度も大学を訪ねる機会がないが、とても懐かしく思っている。今、振り返って見ると、幾多の思い出とともに、私の大学教育において、とても貴重なものであった。

旧女子大の教壇に立つて、初めて担当した科目は、「歴史学」と「西洋文化史」である。最初の授業は、一九七三年四月二十日、午後一時十分からの三時限である。大江キヤ

ンパス九号館の平屋の教室であった。国文・英文学科一、二年次学生を前に、ほとんど講義ノートから目を離すことが出来なかつた。史学概論を講義したが、今、手元にある当時の講義ノートを開いてみると、かなり強引な論である。それから数年後、「西洋史」と改名し、西洋中世史からスイス史へと、西洋史の主題を扱う。ちやうど私の研究が、スイス連邦の成立に取り組み始めた頃なので、「スイス連邦の起源」や「スイス国のはじまり」という題目で、スイス史中心の授業となつた。毎年、必ず講義ノートを作ることと、最新の研究成果を授業に反映するように努めた。それが、現在の「欧米の歴史―スイス学のススメ―」に続いている。授業では、学生にノートを作製させながら、明快な説明を心掛けた。カラフルな「スイス史ノート」が完成した筈だ。そのノートは、今でも卒業生の本棚の片隅にひそんでいられるかもしれない。

「西洋文化史」では、当時、学界の主流であつた社会経済史から文化史を無理矢理引き出そうと、これまた何とも無謀な授業を行つていた。数年後、「中世ドイツの歴史と文化」とか「ヨーロッパ中世世界」を扱い、また、阿部謹也『中世の窓から』を授業に取り入れた年もある。旧女子大最後の二年間、やつと「イギリスの歴史と文化」に到達し、「文化史」らしい授業となる。その後、「ブリテン史への誘い」を経て「ブリテン文化史入門」と、現在、「ヨーロッパ

文化史」で扱っている主題である。ブリテン諸島の歴史と文化について、ケルト文化、ローマ文化、ゲルマン文化そしてキリスト教文化の相互関連から考える視点を打ち出し、ていたら、きつと英文学科学生の刺激になったことだろう。

また、地形と風土から歴史を考える有効な方法として、地図や絵を活用するとともに、ブリテン諸島史跡の特製ビデオを豊富に見せながら、授業を進めていたら、文化史の理解にかなりプラスになったのは、まず間違いない。

英語による文献講読を始めたのは、在職二年目からである。科目を新設しないで、「西洋史概論」をあてた。テキストは、C・ステイヴンソン『中世封建制』という、コンパクトな本である。約一年半くらいかけて読んだ。履修した学生は、四年次英文学科学生数人である。その内容と分り易い文体に惹かれ、その後、同じ著者の『中世史』をテキストにした。数年間に、確かその三分の二くらいまで読んだ。イギリス史の部分を拾い出し、読み返した年もある。毎年、開講したが、一九七七年が特に印象に残る。それは、大江キャンパスの二号館、古い木造校舎の二階の奥まった演習室だった。いつも七、八人だが、この年、学科の半数近くの二十数人が履修した。それに気をよくして、午後一時十分から九十分間のところ、毎回、四時まで引き延ばしたら、一部の学生から大いに文句が出た。それでも、学生はかなり英語読解力を持っており、予想以上に活気が

あったのが忘れられない。四、五人ずつ長方形の机を囲む間を頻繁に行き来しながら、真つ正面から学生に向かった。文法から内容まで、かなりつつこんでやり合った。講読後の爽快感はよかった。

一九八〇年、学部改組で「英米史」となり、英文学科専門科目の一つとして講読を続けた。その間、忘れられないもう一つの出来事がある。たぶん、健軍キャンパスに移転して三年目の一九八二年であろう。季節は忘れたが、確か午後一時半頃だった、と思う。この年の履修学生も多く、三十人の学生で、講義棟東側二階の教室である。とても晴れていた。夢中になって講読していたとき、突然、ドーンという音が遠くから響いた。私も学生も一瞬、何か爆発したのか、と不安を抱きながらも講読を続行した。それが桜島の爆発であったとは、後から知った。快晴のとき、百四十キロの距離でも起こりうる珍しい現象らしい。

そして、旧女子大在職最後の三年間、卒論指導の機会を得た。英文学科で、哲学・思想史や歴史学あるいは非英語圏分野からも卒論の指導ができる、と考えていたが、なかなか実現しなかった。やつと一八八五年、三人の学生が私の卒論指導を希望した。学生に馴染みやすいように、英文学と歴史学の関連を重視して、ちょうど学界で注目されていたアーサー王伝説を共通テーマとする。その後、文学と歴史・社会から、イギリス中世・近世史をテーマとした卒

論も含めると、旧女子大では、全部で十人の卒論を指導した。指導に当たっては、年間計画を綿密に立て、学生が着実に取り組むように配慮した。テーマの設定や問題関心について学生の意向を取り入れながら、徹底した指導方法を貫いた。ほぼ毎週、卒論ゼミを実施し、遅くとも十一月までに編別構成を固めさせた。十二月、草稿作成へと進むが、私は必ず目を通し、添削する。十二月三十日夕方まで添削ゼミを強行し、一月は、もう四日から再開した。締め切り近くまで添削し続け、一月十一日または十二日に提出させる。最後のギリギリまで草稿を推敲し、何と提出日前日から一昼夜で清書を書き上げる離れ業をやつてのけた学生もいた。ワープロやパソコンのない時代、その手書きの文字の乱れが全くないのに、二度驚いた。

振り返るに、私の大学教育において、旧女子大で育まれた研究教育は、大きな出発点であり、現在の貴重な土台となつている。三十五年に及ぶ大学教育において、十五年半の旧女子大での経験が、いわば私の血となり肉となつた。ただ、今でも心残りなことが、二つある。一つは、大学四年間の集大成である卒論を中心に、学生が自由に執筆する研究室論集を一度も発行できなかったことである。もう一つは、英語の文献講読と並んで、ドイツ語、フランス語で歴史書を学生と読む機会を逸したことである。また、現在、スイス史との関連でイタリア語の授業を開講しているが、

もし、イタリア語の文献講読を設けていたら、きっと旧女子大の学生諸君は、大いに関心を持って、積極的に履修したことだろう。

(秋田大学教育文化学部教授)

大学の発展と私の天草版平家物語の研究

江口 正弘（国語学、平成七年退職）

女子大学一学部からの発足

私が熊本女子大学に就任した昭和四十九年頃は文家政学部の一学部だった。県立とはいえ、大学の基盤も弱く一部では廃校にしたらと言うような声もあつてか、外部に検討委員会が設立され、その結果は二学部に充実して存続すべきだということになり、当時の渡鹿の地（現、県立劇場の地）では狭いからということで、現在の月出の地へ移転することになった。

昭和五十五年、文学部となった当時の国文学科の教員組織は、一瀬幸子・重松裕巳・竹原崇雄・木村一信・稲川順一の諸氏と私の六人だった。さらに日本語の国際化の視野から日本語教育課程を作ろうと、馬場良二氏が加わったのは、平成になってからだったと思う。その頃から入学する生徒の人口が漸次減少するから大学の地盤をしつかりしたものにするために、大学院を作ろうという動きが出て、文学部でも大学院申請の方向へと動き始めた。一方日本語日本文学科では一瀬氏は退職、木村氏は転出し、福田益和・小櫃萬津男の両氏が加わって大学院申請へと進んでいった。

現在はどうか知らないが、当時はまだ文部省の審査が厳しく、一度申請して合格しなかった場合、県に対しても地域に対しても申し訳ないことになるので一同緊張したものだ。特に教員の審査は各授業科目を担当するだけの研究業績があるかどうかの審査で、特に日本語日本文学科と英語日本文学科で、ともに〇合と言われる高い業績を持つ教授が三人以上必要だった。平成四年十一月に申請して翌年二月に発表になったが、各科〇合が四人ずつ認められて、めでたく五年度から文学研究科が発足することになった。

申請事務も大変だった。今私の所にその申請した書類が一部残っているが、B5版で一部の厚さが七、八センチもある大部なもの。これらを作製された事務局の方も大変だっただろう。これらを持って文部省に何回か出かけたことは今では懐かしい思い出である。学部はもちろん、大学院文学研究科が、さらに発展することを願うばかりである。

天草版平家物語の研究で思い出すこと

語彙語法研究の資料として「落窪物語・十六夜日記・海道記・東関紀行」などの語彙索引を出版した後、どうしてもやってみるのが「天草版平家物語」であった。この本は室町時代末期、来日したキリシタンが日本語学習のために平家物語の中からおおよそ半分程度の説話を抜き出し、当時の口語でしかもローマ字で表記し、一五九三年天草学林

から出版したもので、今は世界の中でロンドンの大英図書館に一部だけ伝わるといふ世界の孤本である。郷土の天草で出版されたということだけでなく、ローマ字書きと口語資料であるという魅力があつた。ただすぐに取りかかれなかつたのは、ローマ字書きの文章を果たして正確に確実に読み解けるかという不安だつた。索引を作ろうと決心させてくれたのは『邦訳日葡辞書』（岩波書店・昭和五十五年発行）の刊行だつた。

この辞書と覚一本や百二十句本の「古典平家物語」を参考にして何とか索引カードが出来上がり出版へ向かおうとする時、どうしてもしなければならないのは原典の所蔵者、大英図書館からの原本マイクロフィルムの購入と出版の許可だつた。たまたま知人が銀行のロンドン支店に勤務しているのを思い出して、彼に大英図書館に連絡してもらつてやつと購入することが出来た。そうして出版に漕ぎつけたのが、『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院・昭和六十一年十一月）全二冊で、定価一万九千円であつた。明治書院とは前著『落窪物語総索引』が明治書院からということもあつたが、実は同級生の y 君が社長の三樹彰氏とは親戚で以前同席して食事などをした縁もあつて、出版を引き受けて頂いたように思う。

昭和六十二年以後、当時研究室に使い始めたパソコンを使って語彙の入力を試みたが、さらに心理学の山本昌央氏

（故人）に誘われて九州大学の電算室にも通つた思い出もある。女子大学の学術紀要や広島大学の学術誌「国文学攷」などに語彙や語法研究の論文を載せさせてもらつてきたが、それらに新しいものも加えて『天草版平家物語の語彙と語法』（笠間書院・平成六年）として、まとめることが出来たのは、県立大学定年退職の一年前である。この出版には県から出版助成金を頂き、本の何部かを買い取る形での出版だつた。そんなこともあつて、新しく発足した大学院の講義には院生にこの本を無料で配布して院の講義に使用したように記憶している。

右の『対照本文及び総索引』はやがて品切れ絶版となり、古本情報誌でみると、その後定価の二、三倍になつてしまつた。これでは若い研究者が買える価格ではない。また例のマイクロフィルムが空しく書棚に眠っているのも気になつていた折、当時面識はなかつた立命館アジア太平洋大学講師の溝口博幸氏が、天草版平家の研究で拙著にお世話になつたからといって、一冊の本とフロッピー四枚を送り届けてくれた。それは原本のローマ字を原本のとおり活字に翻刻・印刷したものだつた。そこでそのフロッピー四枚を私が CD に移し、さらにマイクロフィルムの原本と、それに邦字の翻刻本文、さらに語彙索引をつけて『天草版平家物語資料大成 CD-ROM 版』としての出版を思ひだつた。かなりの時間がかかつて CD 原稿は一応完成したが、出版す

なるよう是非完成出版したいものである。

るためには専門家に頼んでCDを商品化しなければならぬ。そこで熊本市の富士マイクロ株式会社に頼むことにした。単価の見積りまでお願いし、それで出版を広島市の尚文出版が引き受けてくれた。尚文出版は高校生向けの文法副読本や、『古典文法の研究』（平成七年）を出した縁で、廉価で出版してくれるように頼んで単価八千円で平成十七年九月に出版した。これでマイクロフィルムもCDの中に再び生き返り、研究者も利用しやすくなると一応安心した。

仕上がったCD版はまず大英図書館に寄贈した。二〇〇〇年に同館を訪問し、奥悦子さんという日本人の司書がおられることを知ったので、今度は日本語で手紙を添えて送った。すると同じ日本部司書、大塚靖代さんからメールで「そのCDが現存する天草本平家物語を保護しつつ、世界中の研究者に的確な情報を提供するに相応しい」として同館の備品の一つに加えて頂いた。光栄なことであった。

以上が私の天草版平家物語との関わりだが、この後何ができるかと考えたら、あとは全訳の注釈書があったら一般社会人はもちろん、研究者や若い人々には利用価値があるうと考え、目下注釈の仕事を少しずつ進めている。現在注釈を思い立って二年余、全巻四〇八頁中、三〇〇頁あたりまで済ませているが、何時完成するか、引き受けてくれる出版社があるかなどすべて未定である。そして現在のところこの本の注釈書はまだ一冊もない。中世語研究の一助と

郷土文化研究所について

上河 一之（教育学、平成九年退職）

第二次世界大戦は一九四五（昭和二十）年八月に終結した。敗戦国となったわが国は文化国家建設を標ぼうして世界平和に貢献することを誓った。そして四九年全国一斉に新しい大学制度を出発させた。本学の前身たる熊本女子大学も、専門学校を母胎にしてこの年熊本城内の現在の天守閣付近にあった旧陸軍第六師団指令部の建物を利用して誕生した。そしてその翌五〇年、今の県立劇場敷地に移転して本格的な大学活動を開始した。

ここで取上げる郷土文化研究所とは、この折の敷地移転と同時に大学内に誕生した研究組織体の名称である。一般に大学内に設置される研究所とは設置者が予算を付してその活動を奨励するのが一般的であるが、この場合、熱心な要望にもかかわらず遂に設置者の理解は得られないままの店開きとなった。したがって公式に大学付属の冠を付すことはできず、研究所の運営はそこに所属した教授達の自発的活動と労力提供に依存せざるを得なかった。

一九五〇（昭和二五）年七月二六日発足した同研究所は創設趣意書でつぎのように述べている。

愛するわれらの郷土を新日本の建設にふさわしく民主的的文化郷土として再建するためには、まず郷土の史跡はもとよりすべての文化財を尊重して之が保存整備をはかり、それ等の実証的検討を進めると共に正しい郷土文化史を創生して新世代の依るべき基盤を明らかにすることが必要である。

これまで吾が郷土には文科系の大学が存在せず、従って郷土文化の研究は少数の郷土史研究同好者に委ねられ現地には専門科学の研究所もなく多くは知名歴史家の来訪に依存するに過ぎなかったので、総合的或は継続的研究は著しく制約されて究局は遺憾ながら他地方に比して郷土文化研究の停滞を来したのである。ここにおいて新設各大学の研究室及び本県史跡調査員を中心として、在来の郷土史家並びに各専門家の協力をもとめ、併せて関係各有志各位の支援を仰ぎ共同一致して郷土文化研究の成果をあげ、以て郷土文化を尊重し、文化教育充実振興のために寄与せんことを期する次第である。

指摘するまでもなく敗戦後のわが国の歴史研究は、神話・天皇制中心の皇国史観が批判され、その対局として民衆レベルでの生活実態の分析に基づく科学的歴史研究の構築に傾斜していく。このような歴史観変遷の過程で、地方に埋もれた史料、文献の発掘の必要性が強調されるようになって

てきた。前述の趣意書に当時のこの地方の学的雰囲気を読みとりたいと思う。

さて発足以降研究所は埋もれていた史料文献の発掘、市民を集めての講演開催など活発に動いた。また当時六・三・三・四の新学制が発足以して間もない時であり、新登場した社会科の内容充実が焦眉の課題であった。このような状況において研究所が時代の要請に応じて社会科担当の教員を集めて、組織的講習会を実施していることは記録されてよいだろう。研究所の残存資料には当時の受講者の提出したレポートが多数残存しており、この内容を分析すれば研究所の指導内容が明らかになる。

ところで郷土文化研究所の最大の功績は発掘収集した史料の出版活動であった。「熊本県史料集成」と銘打っての刊行であった。煩さ(瑣)をいとわず出版された書名を挙げればつぎの通りである。「熊本区誌」「肥後国郷帳」「白川県下区画便覧」「仁助咄」「肥後国古塔調査録」「熊本県郡区便覧」「続肥後国古塔調査」「明治前期熊本農業統計」「高木熊太日記」「肥後藩の農民生活」「肥後藩の政治」「明治の熊本」「西南役と熊本」「人吉藩の政治と生活」別巻「熊本県古地図目録」以上一五点。いずれも編著者は郷土文化研究所となっており、発行者は荒木精之、発行所は日本講談社である。日本講談社とは戦前から継続発行されている雑誌「日本談義」の発行元であり、この地方で著名な荒木精之の文

化活動の拠点であった。すなわち財政的基礎が全く弱体であった研究所の出版活動に荒木は惜しみない援助を与えたのであった。もしその支援がなかったならば研究所の活動は極めて制限されたであろう。第一集「肥後藩の政治」の奥付広告をみると、発行部数は各集二〇〇ないし四〇〇部まで不揃いであるが全巻品切れとなっているから、史料集成の売れ行きは好調であったように推定される。

以上の史料集成に続いて、熊本女子大学歴史研究部として刊行されたものに「肥後藩の農業構造」「肥後藩の農村構造」「肥後藩の経済構造」「肥後国郡村誌抄上巻」「同中巻」「肥後国宇土郡村誌抄」「肥後国求麻郡村誌」の各刊行物がある。いずれも当初から高く評価され現在に至るもその存在価値を失わない著作物である。研究所所属教授陣の指導のもと、クラブ活動としての歴史学研究部に集った女子学生達の研究努力によって編集刊行されたものである。

郷土文化研究所の研究活動をリードしたのは圭室諦成(たまむろ・たいじょう)であった。圭室は戦前東京大学史料編集所に籍をおき、さらに駒沢大学に転じて『道元』『日本仏教史概説』を刊行、当時から学者として一定の評価を得ていた。敗戦後郷里の熊本に帰り女子大に籍をおき、この地方の近代史研究に貢献した。既述の熊本県史料集成並びに熊本女子大学歴史研究部刊行の大部分は圭室の解説に成るものである。この間圭室は西郷隆盛や横井小楠研究に

着手しており、のちそれぞれ岩波新書、山川弘文館人物叢書として出版している。また同研究所の所属員には乙益重隆がいた。乙益はのち母校国学院大学に招かれ、教壇に立つかたわら日本考古学協会委員長としてわが国考古学の発展に尽くした。また戦前満州鉄道調査部で史料操作を学び、のち『モルガン「古代社会」資料』『正倉院籍帳の研究』など家族史の分野で特異な業績を挙げた布村一夫、農業経済史専攻の渡辺宗尚などの人材が郷土文化研究所を支えた。

昨年十月中旬熊本市内某デパートで古書画・古書籍展が開かれた。第三八回を銘打っていたからこの展示会の歴史も古くなった。そこには当然、前記の史料集成、熊本女子大学歴史学研究所の出版物の幾種かが古本として展示されていた。「肥後藩の農民生活」六、〇〇〇円「肥後国宇土郡村誌抄」三、五〇〇円というふうだ。これらは昭和二、三〇年代に郷土文化研究所が存在していた頃に出版された古本である。ところで眼を転ずれば、熊本県史料集成全一五冊が八五年（昭和六〇）に一括出版されていることに気付いた。すなわちこの年に国書刊行会という出版社が熊本県史料集成を全巻復刻しているのである。需要と採算を見込んだの復刻であったに相違ない。ちなみにこの古書籍展で全一五巻揃いの売価は四万三千円と値踏みされていた。

昭和三十年代の半ばに郷土文化研究所は悲願の大学付属

の資格を得られないまま姿を消していった。時を同じくして功労者圭室諦成もこの地方の近代史研究に大きな足跡を残して上京した。今「郷土文化研究所」と墨書された一メートル余りの木製看板が本学付属図書館に眠っている。

文学部に乾杯！

「二冊の本」に巡り合つて

下瀬三千郎（英語学、平成九年退職）

退職してこの三月で十年があつと言う間に過ぎ、後期高齢者の仲間入りをした。一片の言葉に過ぎなかった‘Art is long, life is short’^{*}とこう箴言が現実味を帯び身にしみる昨今、歳月は穏やかだが容赦なく流れて、毎日八十分の散歩、週二回のテニス、三週間に一回の研究会が飽くことなく続き、文字通り、「十年一日」の如し。しかも十年どころか四十年（テニスは三十五年）連綿と続いていることを新発見、あまりの変化のなさに我ながら呆れるやら感心するやら。

散歩といえば、私は「十五年戦争」とほぼ同世代で、昭和十五年の高村光太郎作詞の「歩け歩け」を歌って育った戦中派なので、歩くことには何の違和感もない。十九年、旧制中学一年の時の恒例の「菊池行軍」では、一日で往復四十余キロを歩き、終わりの頃は脚が棒のようになり、止まると動けなくなりそうで両脚をロボットよろしく機械的に動かしたのを覚えている。あれから六十年余、時代は大きく変わり車社会になったが、アナログ人間はいまだに「歩け歩け」時代の感覚を引きずりドライブの楽しみとは無

縁である。それかあらぬか、健脚で病知らずの健康優良爺になったとすれば、以て瞑す可し。少年時代に刷り込まれたテクシーに対する私の思い入れには今では信仰に近いものがある。

紙幅の都合でテニスを飛ばし研究会に移ると、研究会が四十年間続いていることは、専門が古英語と中英語だったことと関係がありそうだ。大学では英語のルーツに興味を持ち、十六世紀はシェークスピア（以下「沙翁」）の四大悲劇、十四世紀はチョーサーの‘The Canterbury Tales’やガーウェイン作者による‘Sir Gawain and the Green Knight’、ぐつと遡って源流の八世紀は英雄叙事詩‘Beowulf’^{*}という一見英語とは似ても似つかないゲルマン語に辿り着いた。

古い英語を扱っていると、自然発生的に研究会が立ち上がり、切磋琢磨する運びとなり、その都度、一々三名の同志に恵まれたのは幸運だった。退職後二年で十四世紀のラングランド作‘Piers the Plowman’^{*}を読了、余生は肩肘張らずに研究より読書を楽しむことに発想を転換して沙翁を読むことにした。人間洞察・懐の深さ・スケールの大きさ・面白さのどの点から言っても桁外れの沙翁を、人生の最期に読めるとは贅沢な話で、英語好き冥利につきる。この八十年間で史劇の殆ど全部の九編を読了、ロマンスに移り目下四人で読んでいる‘Cymbeline’^{*}も読了間近にある。

余生は退屈するのではという退職前の懸念もこの「百万

の心の持ち主」のお陰で杞憂に終わり、充実した毎日を送っている。今更言うまでもないが、発想がユニークなら表現もユニークで目くるめくような豊かなレトリックに毎回堪能している。

*‘Our myriad-minded Shakespeare’ (十九世紀のコールリッジの評言)

以上、私の細やかな英語人生の一端に触れたが、実は私は大学二年迄は英語は趣味にとどめ、学部は法学部にはいり将来の志望は公務員になることだった。男児は父親の影響を受けたり反発したりしながら一人前になっていくのだろうか私とて例外ではなかった。「蛙の子は蛙」で、「公務員は生涯身分が安定していいぞ」という父の言葉で何となくその気になっていた。私の父は明治十三年生まれで、昭和四十一年に国家公務員として勲三等瑞宝章を受章して、五十年に九十四歳で亡くなった。文学趣味があり、若い頃は俳句を、晩年は漢詩を作り、書棚には改造社発行の「現代日本文学全集」が揃っていた。(但し、「富国強兵」時代の常識か? 「文学は男子畢生の仕事に非ず」と思っていたフシがある)。せっかく揃っていた我が家の文学全集ではあったが、私には宝の持ち腐れで書棚で眠っていた。「遊びをせんとや生まれけむ」(梁塵秘抄)。まさに三千郎少年は遊ぶのに忙しく本どころではなかった。公務員住宅にはおよそ二十家族が住み、自ずとコミュニティーを形成、遊び友達

に不足はなく、田舎の広大な原っぱで陣取り・ちゃんばら・戦争ごっこ・野球・卓球などに熱中した。今日の子供を取り巻く環境とは対照的に、貧しく、無い無い尽くしのなか、あるものと言えば三つの間(時間・空間・仲間)とハンダリー精神だけだった。青年期に入って、吉川英治の大衆小説「宮本武蔵」を書棚で見つけて読んだが、件の文学全集は何となく敬遠する日々が続いた。

昭和二十四年に新制大学が発足、私は二回生として二十五年に九州大学文科(文学部ではない)に入学した。よその大学の事情は知らないが、私が入学した大学では米国の影響により教養教育を重視し、最初の二年間は文科と理科の区別があるだけで、全員教養課程に属し専門学部を決めるのは三年に上がる時だった。入学時から専門の学部が決まる現在の制度だったら、私は法学部に入り、違った人生になっていたかと思うと自分でも不思議な気がする。

ところで、大学生になった私は、一般の文学青年から一周も二周も遅れてやつと本に目覚め、本を通して人間の内面に目を向け、ありあまる自由時間を読書に充てた。法律や経済の本や授業は胸に響かぬ俣に、「戦争と平和」「アンナカレーニナ」、「ボバリー夫人」、「ブッデンブローク家の人々」、「チボー家の人々」、漱石の「心」その他、「人間失格」「斜陽」、「墮落論」など小説中心に乱読した。なかでも、特に私の心の琴線に触れたのは「カラマーゾフの兄弟」と

「罪と罰」の二冊だった。この「罪と罰」への傾倒は、あれは青春時代の青臭い感傷に過ぎなかったのではと思ひ、この春読み返してみたが白髪になっても感銘は変わらなかつた。俄然、ラスコーリニコフと聖なる娼婦ソーニヤの舞台サンクトペテルブルグを訪ねてみたくなつた。おくての私はこの時初めて文学の醍醐味を味わひ文学の何たるかを知つた。今にして思えば原点は父の書棚の文学全集にあり、機が熟していたのかも知れない。

文学部と言へば、五高の英語教師だつた漱石が頭にあり、文学部には英語がどんなに得意でも文才がなければ行くところではないとひとり思い込んでいた私が、この時ばかりは何故か自分に文才も感受性もないのを忘れて、法学部から文学部へ志望を変更した。この時が「文学は趣味にとどめとけ」という父の助言の呪縛から解放された瞬間だつた。「青春時代のまん中は道にまよっているばかり」（阿久悠）。かくて、公務員に成りそびれた私は漱石のいわゆる「道楽仕事」を選ぶことになつた。国家公務員の持つ権力とか華やかさとは無縁の地味な職業だつたが、組織に縛られることなく、英語一筋で定年まで来られたのは有難いことだつた。

これで近況報告を終わり、卒業生と在学生に‘Cymbeline’の中から名言を一つだけ贈ることにしよう。

Consider, When you above perceive me like a crow,
That it is place which lessens and sets off.

— III.iii.11-13.

(いいか、あの上から見おろすと、おれが烏ぐらひに見えるだろう。物が小さく見えたり引き立って見えたりするのは、それはその人が置かれた立場次第だ。)

最後になりましたが、この度は熊本県立大学文学部六十年おめでとうございます。効率や実利が声高に叫ばれる昨今、こういう時代だからこそ益々文学部の存在理由が問われ、責任重大かと思われまふ。文学部の文学部たる所以のものは、腰を据えて本を読み、心の内面を広く深く掘り下げて磨き、目先の利益に囚われることなく長い目で物を見、自由に物を考えることの出来る人材を育成するところにあると思ひます。私も今度生まれ変わつたら、今度こそ迷うことなく最初から文学部を選びます。

平成十九年十一月十五日

二十八年間を振り返って

平戸 喜文（英文学、平成九年退職）

大学紛争の嵐が吹き荒れていた昭和四十四年の四月、私は熊大教養部を辞して県立の女子大に移った。かねて女子大英文科の阿波保喬教授（のちに第四代学長）から異動を打診されていたからである。熊大では学生が教官を追及する、いわゆる団交なるものがおこなわれて、急進派の学生が音頭をとり、大学のあるべき姿、殊に産学協同に傾く日本の大学の姿勢を厳しく糾弾した。さらに連日の授業妨害、果ては授業放棄が長期化する様相を呈していた。

女子大に移ってみて、たまに極く一部の学生のシユプレヒコールが聞こえることはあったが、前任校の雰囲気と較べるとおおむね別天地と言つてよかつた。ここでは気持ちよく授業が出来た。二千メートルと離れていない二つの大学で、何故こうも違うのかと不思議なくらいだった。

転勤して三年目に短期海外研修の機会が与えられ、アメリカ合衆国を振り出しに、連合王国のほかヨーロッパを十カ国ばかり見て回った。一九七一年夏のこと、ニクソン・ショックによるドル（一ドルが三百六十円だった）の暴落のため、ドル建て旅行小切手の相当な目減りを体験したし、

イギリスでは数世紀間つづいた独特の通貨制度が十進法に改まった年である。

翌年、県は熊本女子大学基本問題審議会を発足させて、大学の存廃も含めて女子大の現状分析がなされ、将来像が検討された。忘年会に同道した折、柿村峻第三代学長が「女子大の存続を知事に答申することが決まって本当に良かった」と、胸を撫でおろしておられたのをよく覚えている。

やがて時代の趨勢に沿って学部・学科の拡充・再編が図られ、具体化するにつれて、敷地面積（現県立劇場）が狭きに失するとあつて、街中から郊外（旧熊本空港跡地）へ移転することになった。

新しいキャンパスに移って五年目の夏（昭和六十年）、細川護熙県知事の私的諮問機関として熊本女子大学問題懇話会が発足し、男女共学化問題の口火が切られた。そんななか私は再び外地研修が認められた。僅か二カ月間なのでイギリスだけで過ごすことにし、ロンドン西北部に家を借りた。そして銀婚の年にあたる家内を呼んで、週末には、十四年前に果たせなかつた湖水地方での民宿やウエールズの古城巡り、ストーンヘンジ見物などを二人で楽しんだ。

元号が平成に変わった頃から、県立の大学として地域の要望に応えるべく、外国語教育センターの設立、大学院の創設、共学化へと学内は俄にあわたしくなった。特に共学化については根強い反対の声もあつた。この重大かつ多

忙な時期に、多分誰よりも会議嫌いの私が、あろうことか文学部長を務める羽目に陥った。言うまでもなく学部長は評議会を始めいろいろな会議に出席し、教授会、人事教授会など幾つもの会議の司会をしなければならぬ。とりわけ毎月最終火曜日の定例教授会が近づく、数日前から憂鬱になったものである。しかし今にして思えば学部長を務めたお陰で得難い経験もした。平成二年度と三年度のこと、この間全国の公立女子大学部長会議に出席したり、県外からの受験希望者への説明会に出掛けたり、大学院関係では設置審議会の有力メンバーを関西に訪ねたり、学内的には外国語教育センターの地鎮式に列席したり、事務局を通して拡充に伴う担当教員の純増を県の人事課に要望したり、男女共学への最終的な賛否を問う画期的な教授会の熱のこもった論議を司会したりと、印象深い事柄が目白押しである。教員の推薦を求めて、あるいは特別講義を依頼した時に貰った、著名な学者の封書や葉書は得難い記念である。

誰にもいつかは現役を退く時がくる。

定年を二、三ヵ月後に控えた頃から、研究室に堆く積まれた紙の山を処分し始めた。大半は会議の資料や議事録、教材のコピー類で、これは㊟を除いて可燃物用ポリ容器へ、黄色くなった答案やレポート、卒業論文の下書きなど、学生の名前のあるものはそのまま捨てる訳にいかないので、少しずつ事務局へ持って行った。印刷室に在るシュレッダー

にかけていると、つい残りの何十日かを愛惜の思いでカウントダウンしている自分に気づき、辛かったこと楽しかったことがこもこも憶い起こされた。

繰り返すが誰にもいつかは現役を退く時がくる。その時をどのように迎えるかは人それぞれだろうが、永年勤めあげた定年退職者は皆一様に、ヤヌス（古代イタリアの門や入口の守護神で、事の始めと終りを司る）に似て、頭の前と後ろに顔をもっているものである。来し方をふり返る顔と、行く末に臨む顔である。ご多分にもれず私も二つの顔をもつて定年を迎えた。

退職の辞令を貰った日の翌朝は早く目が醒めた。ああ、今日から勤務時間に縛られず、一日二十四時間を好きなように過ごせるのだという思いが、静かな悦びとなって全身に漲り、さらに目が冴えた。無論現役でなくなったことの淋しさも頭の一隅にはあったけれど、自由の身のありがたさは格別だった。

退職してすでに十年になる。女子大・県立大合せて二十八年間の在職中、第二代から第八代までの七名の歴代学長の警咳に接し、多くの方々を送り出し、より多くの人たちを迎え入れてきた。

長いあいだ立派な同僚に囲まれ、良い学生に恵まれて仕事ができただけを感謝しながら、此の上とも熊本県立大学の躍進を願っている。

（二〇〇七年 秋）

月毛の駒

竹原 崇雄（日本文学、平成十二年退職）

女子大学に赴任したのは四十四歳の時であった。こんな年齢をとつてその時は残念に思ったものであったが、今から考えるとまだ十分に若かった。私の人生は後悔の思いがついて回っているような気がしてならない。大江の古い板張りの研究室で過ごしたのは一年間であった。木々に囲まれた季節の香りが漂う校舎であった。冬は寒かった。入口の柱に掛けてあったネームプレートを助手の上田さんが引越しの日外して持ってきてくれた。今も机の引き出しの中にある。

昭和五十五年健軍の地に移った。南側の総管の位置するあたりで牛の競りがあつていた。競りの声と牛の鳴き声とが奇妙な調和を保つて聞こえてきた。現在外語センターの建っているあたりは芝生の庭で、英文科の卒業生が記念樹として植えた枝垂桜が細い枝にいくつかの花をつけるようになっていた。その桜は今は東側の中庭に移し植えられて巨木となり、春になると空をおおうように紅の花房を垂らしている。研究室の前には一群の松林があり、それが太平洋戦争末期沖繩へ特攻隊を乗せて飛び立った飛龍を見送る

かのように立っていた「見送りの松」であるとは後で知った。今は四本が梢を風に揺らしている。松は厳めしく優しかった。黄色い花が咲き、青い実を着けやがて松かさとなって地面に落ちる、その一年の変化を二十回眺めて私は大学を去った。

昭和五十八年の秋頃であつたらうか紫苑会の方が数名研究室に來られて読書会に参加しないかと誘ってくださった。最初は伊勢を読んだり三島を読んだりしていたがいつの頃から源氏物語を巻を追って読むように定着した。深く読むというのではなく、口語訳しながら物語の流れを追っていくのであるが、そこには、好色な源氏の姿、厳しくも巧みな政治家源氏、それを取り巻く女達の喜怒哀楽、侍女や乳母に至るまで微細な人生の縮図が実現している。その中で明石巻の一場面が鮮明に印象に残っている。

朧月夜との情事が発覚し須磨に退隠した源氏は桐壺院の夢告による住吉明神の導きによつて明石に移る。明石入道の計らいでその娘のもとを訪れることになる。仲秋の月のはなやかな夜源氏は月毛の馬に跨って出かける。この時源氏の胸を去來したのは都に残した紫上の面影であつた。

秋の夜の月毛の駒よわが恋ふる雲井をかけれ時のまも見ん

月毛とはとき色のこと。「ときいろに輝く校舎」とは、村中史朗（末吉）作詞、信時潔作曲の女子大の校歌の一節で

ある（埋没させるには惜しい名曲）。源氏は月光に輝く馬を鞭打って「時の間も見む」と恋しい紫上を思いつつ現実には明石の御方のもとを訪れる。これは不実な源氏を描いているのではない。このようなときにおいても紫上を忘れない誠実な愛のあり方を紫式部は理想的主人公源氏において実践せしめているのである。まだ見ぬ明石の方への興味よりも、引き裂かれた紫上への慕情のほうが強かった。源氏は罪人として配流されている。周りには女の気配はない。抑圧された欲望を観念の紫上へ向かって放出し、まだ見ぬ明石の方にその映像を貼り付けて行動を起こしたのである。明石の方は、紫上の形代としての役割だけでなく、悲運の源氏の運命を逆転させる回転軸としての役割を果たす女性であった。そこへ向かう源氏が「月毛の駒よ」と呼びかけ「雲井をかけれ」と鞭打つのも自らの運命の上昇を無意識のうち自覚したからにはかならなかった。運命の命ずるがままの行動であったということが出来る。

松平健扮するところの暴れん坊將軍は白馬に跨って登場する。その運命はどう逆転したのかきらびやかな衣装だけが無意味に目を引く無様な松健サンバとして終結した。

私は現在白い車に乗っている。あと何年乗ることが出来るかわからないが、いまのうちに月毛色に買い換えたほうがこれからの人生にいくらかでも夢らしきものを見出すことが出来るのではなからうか。しかしとき色の車はなかなか

か見かけない。とすれば、今の車で我慢するとき色の衣装を身にまとって乗ればすこしはその気分の分け前にあずかれるかもしれない。その時、私の老残の身は蘇るとき色に輝く月光の下を新たな運命へ向かって疾走するにちがいない。いや、老人の運転は危険だ。サンバでも踊っているほうが安全かもしれない。しかし、この歳で骨折でもしたら寝たきりになるのは必定。

重い現実はどうまい。気ままに軽やかな観念の世界に遊ぶことこそが今の私に許された運命の範囲なのであろう。

六月の中旬、梅雨空の下をホトトギスが鳴いて渡っていく。光化学スモッグ注意報の出ている重い空を引き裂くように哀しく聞こえる。須磨巻の前に位置する花散里巻は美しい。源氏は「五月雨の空めづらしく晴れたる」時花散里のもとを訪れる。ひっそりと生きる女、言すくない男、この短編に描かれた人生の断片をホトトギスの声のはかなくしかも鮮明に紡いでいく。

「疾走」は止めた。言すくなく長生きしよう。そのうち思わぬ幸運が舞い込むかもしれない。「如何に生きるか」という前向き議論よりもかすかな影のようにしてでも存在することこそが価値なのである。影ならば後悔もない。「月毛の駒」は夢の夢、灰色の道の芝に宿る露の光を細い足で辿ることにしよう。

近況二三

小櫃万津男（日本文学、平成十三年退職）

熊本県立大学が創立六十周年を迎えるという。私が在職したのはその内の十年（平成三年から同十三年）に過ぎないが、誠におめでたいと思う。そして何やら誇らしくもある。定年退職してこの三月で七年にもなるのに、大学の名が新聞などに出ると注目してしまう。このような懐かしい気持ちは終生変わらないだろうと思う。

さて近況の二三を記すこととする。

平成十八年七月家内がくも膜下出血で入院してしまった。即刻手術となり、脳外科医の長男が主治医兼執刀医となり、手術は成功した。実は長男は奈良県立医大を出て以来、大学の医局から派遣され、関西のいくつかの病院で研修を続けていたのであるが、今般医局を出て独立して横浜に帰っていたのだ。新しい病院に勤め始めて二週間後の出来事で、まるで母親の手術のために帰ってきたようで運命の不思議を思わずには居られなかった。家内の入院で私もそれにつき添う形で入院した。このところしつこい腰痛に悩んでいたからだ。入院に続いて現在は老人保健施設に居る。併せてもう一年以上になるのに、未だ開放させてくれない。見

たところもう全治しているのだが…。

この施設に入っている人たちの観察は、良い社会勉強である。先ず百歳を越える男性が二人も居るのには驚いた。百歳を越える人なんて今まで話題に聞くことはあっても、実物は見たことがなかったので、興味津々だった。一人は車椅子であるが、それを自由に操っている。もう一人は手すりにつかまりながらではあるが、自力で歩いている。その他九十年代、八十年代の人はたくさん居り、私の七十二歳などまるでチンピラみたいだ。百歳まで約三十年ある訳で、これは大変だ。研究計画を建て直さなければいけないなど、呑気なことを考えてしまった。これはよいお手本であるが、反面教師にも事欠かない。あんな老人にはなるまいと思う人達である。これはどの社会でも同じだと思う。

この施設ではカラオケをよくやる。カラオケは学生諸君とよくやったが、それ以来久々のことで、目下私の「青春時代」（卒業前の半年で答えを出すというけれど…と歌うあの曲である）が受けていて、楽しい思いをしている。

研究は四冊目の著書となる予定の『日本新劇理念史』明治後期編を執筆している。本文はほぼ出来上がっているが、註をつけるという大仕事控えて居り、完成には今少しばかりそうだ。この後期編が出来上がって、初めて完成となるので、生きている内にこれだけは完成させたいと思う。

昨年十月十九日・二十日に母校早大の国文科のクラス

会と、大学の創立百二十五年の同窓会、ホームカミングデイがあり。級友二十二人が集まり楽しい一時を過ごした。実は我々は昭和三十三年の卒業で、卒業から五十年という記念の年であった。満で数えると平成二十年三月に満五十年になるのであるが、大学の数え方に従ったのである。卒業後五十年という記念の年に二十二名もの出席を得たクラス会が出来たことは、珍しいのではないかと思う。私は若い頃、行方不明となった級友たちの行方を探すのが得意で、住所不明は現在十一名に過ぎない。そんなことから級友たちにもいつも君のような人が居たから、クラス会が続けられたと感謝されることが多かった。その結果、いつの間にか会長と呼ばれるようになったが、本人はそんなものに就任した覚えはないと言うのが常であったが、今回の五十年記念のクラス会では、すすめに応じて初めて乾杯の音頭を取らせてもらった。感慨無量だったのである。

県立大学の学生諸君も、卒業五十年のクラス会が持てるように長生きして欲しいと願っている。

イギリスの庭園を訪ねて

重松 隆矣（英文学、平成十四年退職）

二〇〇五年三月に妻と私はそれぞれの大学を退き長年の教職生活に終止符を打った。この稀なるシンクロニシティを記念すべく六月から七月にかけて三週間イギリスの田園を旅した。改修のためにヨークに遷されて二年ぶりに古巣に戻ったアスコットの最終日の観戦から旅は始まり、間に五日間のウインブルドン観戦をはさんで、一週目はサリーの、二週目はコツウオルズの主として庭園を訪れた。猫の額ほどの我が家のハンカチーフガーデンとは桁違いの三から一五〇エーカーのいずれも広大な庭園である。二つの庭を覗いてみる。

ベージング郊外アプトングレイのマナーハウスガーデンに強い感銘を受けた。主のロザムンド・ウオリンジャと二匹のラブラドルが案内の労をとってくれたのは、ローズの友人であるわがB&Bの女主人（BBといってもかつてはマナーハウスであった重厚なお屋敷だが）が私たちの訪問を予告しておいてくれた効き目である。ローズ夫妻はロンドンのウイラ・ウルバティを逃れてこの地にウイラ・ルステイカの拠点を見出したのだが、購めた敷地が Arts and

Crafts movement に名を馳せたかの庭園設計家ガートルード・ジェイキルの作品の荒廃した姿であることを偶然に知ったローズは、カリフォルニアに埋もれていた設計図を発掘し、十五年の歳月をかけて七十年前の庭園を復元したのであった。それはアマチュア庭園学者兼造園職人としてのローズの正に一木一草にいたるまで忠実な復元である。ハウスを中心に東に *Formal*、西に *Wild Garden* を配したデザインの中で視覚に最も強く訴えるのはハーブコーナーであろうか。白と青が基調の「冷」から赤とオレンジの「温」へ、再び「冷」へと連なる色彩の起伏はピクチャレスクの一語がぴったりだ。ローズには *Gertrude Jekyll's Lost Garden* なる著作があるが、そこに引かれている "Planting ground is painting the landscape with living things." というジェイキルの造園美学が見事に息づいている。サセックスのポードヒルガーデンにラドヤード・キプリングが "England is a garden, and a garden is not made by singing 'Oh, how beautiful and sitting in the shade.'" という句とはを残している。教訓めいた響きがお歯に合わないが、ローズの復元という名の創造と継承の営みを予言していると言えなくもない。ローズからは、私たちのために割いてくれた貴重な時間と、グリーンフィンガースタイルでピチャーから注いでくれた冷たい水と、 *All England Lawn Tennis and Croquet Club* のスタッフからターフの育成について専門的

なアドバイスを受けた折の逸話と、それを活かして維持されている一面のターフコートで次回はテニスをとってお招きと、著書の扉に "Happy gardening!" の為書きとを頂戴した。

イギリス小説でも庭という区切られた空間でさまざまにドラマが展開する。今回の旅ではチピングデイル、コツウオルズのキフツゲイトコートガーデンで二五年ぶりの再会があった。その昔オクスフォード滞在中一家でお世話になったジル・フレンチの瞳は、憂いを帯びて美しく開かれ、ヴァジニア・ウルフの連想を禁じえない。子の独立、離婚、大学退職・・・ジルの上にも歳月は必然のタブローを描く。父親譲りの 'love of gardening' だけは時間の軸として動かない。自家菜園から摘んできたラズベリーをつまみながら、三人は四半世紀の時の流れを受け入れた。 *To the Lighthouse* では、ラムジー夫人の意識を通り過ぎる歳月がリリー・ブルスコアの最後の一刷けによってタブローを完成したのだったが・・・キフツゲイトには多分英国一の一本のナニワノイバラの古木があつて、長辺十五、高さ二十メートル近くに枝を張り、庭園の一角を占有する。旺盛なその生命力は、たとえお屋敷が廃墟と化してもキフツゲイトローズだけは生き残るだろうというジョークを生んでいる。時間を受け入れた三人は、このジョークを大らかに笑った。

庭園観光のあいだマリアンヌ・ムアの一行 "Poetry・・・

an imaginative garden with real toads in it." がリフレインのように甦った。三週を経て立ち戻ると、わがハンカチーフガーデンではナニワノイバラが二メートルに枝を広げて待っていた。それをバビロニアアーナクマモトなるわが架空の庭園にヒキガエルをお供につけて移し植え、旺盛な生命力の成り行きに任せている。

(熊本県立大学名誉教授)

貴婦人と一角獣

小辻 梅子（英文学、平成十六年退職）

パリに行ったら会いたい女性がいる。

彼女とはリュクサンブール公園の近くで十一年前はじめて会ったのだが、じつはその前にアイリス・マードック『一角獣』ペンギン版の表紙で彼女を見てとても興味を抱いていた。

一角獣が前足を貴婦人の膝に載せておとなしく座っている。貴婦人の持つ手鏡には一角獣が映っている。説明は『貴婦人と一角獣―視覚―』クリュニー美術館」

そう、彼女は美術館の住人、美術品の中の人物なのだ。作品が造られたのは十五世紀末。

彼女の住まいクリュニー美術館（現国立中世美術館）はパリのど真ん中、ソルボンヌ大学のすぐそばにある。美術館の階上の円形の部屋に六枚のタペストリーが展示されている。それぞれに貴婦人と侍女と一角獣とライオンが織り込まれている。六人の貴婦人が同一人物なのかどうかは分からない。織り方にもよるのか、それぞれ顔も違うし、年齢も違うように見える。

五枚のタペストリーには「視覚」「聴覚」「味覚」「触覚」

「嗅覚」の寓意が込められている。いちばん大きな一枚はテントの上部に A MON SEUL DESIR（わがただひとつの願い）の文字が読める。豪華な衣装を身にまとった貴婦人が、高価な装飾品を手にしているところだ。彼女はこれからそれを身に着けようとしているのか、それとも宝石箱にしまおうとしているのか。身に着けようとしているのなら、A MON SEUL DESIR は「わが唯一の欲望のために」とも解積できる。

タペストリーに関してはわずかな事実しか知られていない。

解説書によれば、十五世紀後半に、ブリュッセルで織られたらしい。最初の所有者はジャン・ル・ヴィスト。リヨン出身のヴィスト家は宮廷で異例の出世を遂げ、紋章を使うことを許された。赤地に、青の左斜め帯線、帯線の中に三つの金色の三日月、この紋章の付いた旗、幟、盾、旗竿、マントがタペストリーの中には描きこまれている。

タペストリーは、ジャンの長女クロードが相続したが、彼女に子供がなかったため、その後人手に渡ったようで、十七世紀半ばにフランス中部の城で発見された。一九世紀半ば、史跡検査官をしていた『カルメン』の作者プロスペル・メリメが同じ場所で再発見。また男装の作家でシヨパンの恋人でもあったジュールジュ・サンドがタペストリーを題材とする記事、小説、日記を書いて、擁護者となった。

十九世紀末にフランス政府がクリュニー美術館に収蔵するために購入し、修復を施したタペストリーは、今もこの美術館内に特別に設えられた部屋に掛けられている。

この背景も経緯もほとんど知られていない芸術品の謎に迫る小説『貴婦人と一角獣』が二〇〇三年刊行され、日本でも二〇〇五年に翻訳が出版された。著者は映画『真珠の耳飾りの少女』の原作者、トレイシー・シュヴァリエ。

シュヴァリエは、大胆な想像力を駆使して、注文主とその家族、デザインを担当した絵師ニコラ、ブリュッセルの織物工房とその一家に連なる人物群を配置し、個々の人物の視点から、タペストリー制作の過程を追う。

もともと興味を惹くのは、貴婦人のモデルは誰か、だ。

この小説では、「味覚」のモデルはクロード、「わがただひとつの願いに」は注文主ジャンの妻ジュヌヴィエーヴ、「触覚」は織物工房の主の妻クリステイヌ、「視覚」はその盲目の娘アリエール、になっている。デザインをしたニコラの女性観と彼女たちとの関係が色濃く反映している。ニコラとクロードはお互いに惹かれあっているが、身分の差はどうしてものりこえられない。

ジュヌヴィエーヴは修道院に入ることを願っている。それが彼女の「ただひとつの願ひ」というわけだ。そのため彼女は現世の欲望の象徴である首飾りはずしている。

面長の長い髪、鰓の張った尖った顎の「触覚」の貴婦人

は、右手に旗竿、左手に一角獣の角を挿んでいる。自信と誇りに満ちた織元の妻というわけだ。

アリエールはバリから来た女たらしのニコラの子を身ごもるが、父の弟子の下絵描きと結婚する。盲目の彼女が「視覚」を受け持つのも何か意味ありげであり、皮肉でもある。ニコラはぎりぎりになってこのモデルをアリエールに変更した。出来上がったタペストリーを見て、母親のクリステイヌは「なんと残酷な」と憤る。

タペストリーには、貴婦人と一角獣のほかに侍女とライオン、その他の小動物や鳥、樹木や花々があざやかに描かれ織り込まれている。ひとつひとつを詳細に見ていけば、さまざまな物語が紡ぎ出されそうだ。

今度また貴婦人と一角獣に会える機会があるかどうか分らないけれども、もし会えたら想像力を刺激されることは間違いなさそうだ。